

談話レベルで見た誘い行動の韓日対照研究

-親しい友人間の会話を用いて-

鄭 榮 美*

(e-mail : youngmi0425@hotmail.com)

目 次

1. はじめに
 2. 先行研究及び「ポライトネス理論」の概要
 3. 会話データの概要
 4. 分析方法
 5. 分析結果及び考察
 6. 終わりに
-

1. はじめに

会話の中で会話参加者は自分が意図している事柄を相手に伝えるためになんらかのストラテジーを使う。ストラテジーは発話レベルのものもあり、談話レベルのものもある。しかし、言語行動に関する研究ではそのほとんどが発話レベルのストラテジーに焦点がおかれており、談話レベルのストラテジーに注目したものはその数が少ない。柏崎 (1995 : 62) は円滑なコミュニケーションのためには、談話レベルで言語行動を捉え、談話の展開の仕方を知るべきであると述べている。本稿では韓国語と日本語の友人間の誘い行動における談話レベルの誘い行動の流れとストラテジーの実態を明らかにすることを目的とする。

本稿では、話し手が聞き手と将来の行為Aとともに遂行する意図を持ち、聞き手が行為Aを一緒に行うように働きかける言語行為を「誘い」とし、誘いや誘いを行うための先行するやりとり、誘いに対する聞き手の反応、「将来の行為A」を実行に移すための話し合い

* 한국관광대학 관광일본어과 겸임

など、誘いに関連した話し手と聞き手のやりとりを「誘い行動」と定義する。

2. 先行研究及び「ポライトネス理論」の概要

2.1 誘いに関する先行研究

日本語では誘い¹⁾を叙法の一つとして認めないのが一般的であるが、韓国語においては研究者によって分類の仕方や用語の違いはあるものの、誘いを叙法の一つとして分類するのが一般的であると言える。そのためか日本語では、誘いの機能を有する表現に焦点をおいた研究（仁田1989、姫野1991・2000、堀口1975など）が多く、韓国語では叙法の分類の一つとして誘いを取り上げているものが多い（高永根1992、서정수1996、최현배1978、허웅1975など）。

誘いとそれに対する「反応」を発話行為として取り上げたものには、日本語では大倉(2002)、劉建華(1985)などがあるが、韓国語においては、筆者が調べたところ、장정희(2000)のみである。また、誘いの談話構造に焦点をおいたものは日本語におけるザトラウスキー(1993)、鈴木(2003)、筒井(2002)があり、韓日対照研究の鄭榮美(2007, 2011)がある。García(1992, 1999)と鄭榮美(2006)は「誘い」におけるポライトネ・ストラテジーについて分析している。

これらの研究は分析の単位を発話(文) またはいくつかの発話連鎖としている。本稿ではここから一歩進み、分析単位としての「談話」というものを設け、韓国語と日本語における誘い行動の特徴を明らかにすることを試みる。

2.2 Brown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」の概要

本稿では談話レベルでの韓日の誘い行動の特徴をBrown and Levinson(1987)の「ポライトネス理論」に関連付けて考察する。Brown and Levinsonは人間の基本的な欲求としてのフェイスというものが、そこには「他人にじゃまされたくないという欲求」の「ネガティブ・フェイス(negative face)」と「他人に認められたい、好かれたいという欲求」の「ポジティブ・フェイス(positive face)」の二種類があるという。フェイスは普遍性を持つものであるが、その中身は文化によって異なると説明している。また、本質的に聞き手と話し手の(またはどちらかの)フェイスに反するような行為を「フェイス侵害行為(face threatening acts : FTA)」と呼んでいる。FTAの持つフェイス侵害の度合い(Wx)は、話し手(S)と聞

1) 先行研究では「勧誘」(韓国語では「請誘」)という術語が用いられているものが多いが、本稿では「誘い」という術語を用いる。

き手(H)の社会的距離の見積もり(D)、HがSに対して持っている力の見積もり(P)、その文化におけるFTA_xの負担の度合いの見積もり(R_x)を合わせて測定する($W_x = D(S, H) + P(S, H) + R_x$)と述べている。話し手はW_xによって、まずその行為を行うか(Do the FTA)、行わないか(Don't do the FTA)を決定し、FTAを行う場合は、明示的に表現するか(on record)、ほのめかすか(off record)を決める。明示的に表現する場合は軽減行為を行わずに明さまに表現するか(baldly)、軽減行為を行うか(ポジティブ・ポライトネス(positive politeness)、またはネガティブ・ポライトネス(negative politeness))を選択する。ポジティブ・ポライトネスは、聞き手のポジティブ・フェイスに向けられた配慮行動で15種類のストラテジーがあり、相手への接近が基本となっている。ネガティブ・ポライトネスは、聞き手のネガティブ・フェイスに向けられた配慮行動で10種類のストラテジーがあり、控えめな態度、格式、遠慮として特徴づけられる。ほのめかしにも15種類のストラテジーが挙げられている。

3. 会話データの概要

3.1 会話データの収録

会話データは、会話参加者間の「社会的距離」、「力関係」、「ある行為が相手にかかる負荷度」という3つの要因を条件統制した上で収録したものである。大学の親しい同性の同級生(友人)ということで「社会的距離」と「力関係」を統制し、負担に思わないことを誘うということで「ある行為が相手にかかる負荷度」を「少」に統制した。

会話収録は、韓国語データは2003年～2006年、日本語データは2003年～2007年にかけて行った。収録にあたっては、筆者が一人の協力者に、親しい同性の友人²⁾と会話収録に参加することを依頼する形で協力を得た。協力者は韓日の各言語を母語とする女子大学生である。収録場所は、大学の教室、図書館、協力者の自宅などである。収録の際には、まず、協力者ペアを指定の場所に移動させ、フェイス・シートを記入するよう指示し、協力者が本稿における協力者の条件に適しているかどうかを確認した。その後、研究者が協力者ペアの一人(以後、直接協力者)に、「会話の相手に自分が負担に思わないことを誘ってください」という依頼と会話収録における注意事項が書いてある紙を渡した。もう一人の協力者(以後、間接協力者)には注意事項のみが書いてある紙を渡した。間接協力者には会話の収録中に「誘い」が行われることを知らせていない。注意事項として、できるだけ普段とお話しすること、収録時間は15分～20分を目安とするが、提示された時間を無理に守る必要はなく、自然に会話を終了させるように指示してある。直接協力者の注意

2) 協力者間の親しきはフォローアップ・アンケート調査で5段階評価をし、韓国語では平均1.38、日本 1.50を得た。韓日ともにすべての会話参加者が会話相手と親しい関係であると回答していた。

事項には、無理に相手を誘う必要はなく、誘いにくいと思った場合は誘わなくてもいいということをつけ加えている。教示の後、研究者はその場を離れた。会話収録後には、会話に関する5段階評定のフォローアップ・アンケート調査を行い、データの妥当性を検討した。

3.2 会話データの基本情報

本稿では条件統制と会話の自然さの基準で有効と認めた韓国語12会話、日本語12会話を分析対象とする。協力者は韓日12ペアずつ(計48名)で、会話収録当時は18歳～23歳の女子大学生である。韓国語会話データの総時間は2時間13分38秒、1会話当たりの平均所要時間は668.17秒、標準偏差は154.74である。日本語会話データの総時間は3時間54分41秒、1会話当たりの平均所要時間は1172.58秒、標準偏差は415.90である。韓日の会話時間を独立したサンプルの t 検定で比較した結果、その差は有意であった($t(22)=3.938, p<.01$)³⁾。日本語の方が韓国語より会話時間が長く、会話ごとにバラつきも大きいことが分かる。

韓国語データは、宇佐美他(2007)の「基本的な文字化の原則：韓国語版(Basic Transcription System for Korean: BTSK)」に従い、日本語データは、宇佐美(2007)の「基本的な文字化の原則(Basic Transcription System for Japanese: BTSJ)」に従って文字化資料を作成した⁴⁾。会話のすべてを文字化した結果、韓国語データの総発話文数は3631文、1会話当たりの平均発話文数は302.58文、標準偏差は88.40であった。日本語データの総発話文数は6118文、1会話当たりの平均発話文数は509.83文、標準偏差は204.21であった。韓日の発話文数の違いを独立したサンプルの t 検定で検討した結果、有意であった($t(22)=3.226, p<.01$)。日本語の方が韓国語より発話文数が多いことが分かる。

韓国語データでは12会話中、計26の誘い行動が抽出でき、日本語データでは12会話中、計17の誘い行動が抽出できた。すべての誘いは相手から受諾を得ている。誘い内容は「映画を見る」、「食事をする」など、その内容が多岐にわたっているが、各誘い行動は「親しい友人間で起こった負担の少ない誘い行動」という条件を満たしている。

4. 分析方法

談話レベルで誘い行動を分析するにあたって、まず本稿で捉える分析単位としての「談

3) この検定と以下の発話文数の検定においてはLeveneの検定によって等分散が仮定できた。

4) BTSKとBTSJでは発話文を改行と基本単位とする。発話文とは「会話という相互作用の中における文」(宇佐、2007:17)である。

話」について述べる。その後、談話レベルでの誘い行動の分析方法について説明する。

4.1 本稿における談話

本稿では、誘い行動を一文・一発話のレベルの分析に留まらず、より大きい言語単位レベルでの分析を試みる。文より大きい言語単位を表す言葉には、談話、テキスト、「文章」⁵⁾などがあるが、本稿では、分析対象とするものが話し言葉で実現される会話ということから「談話」という用語を用いる⁶⁾。また、Halliday and Hasan(1976)にならい、「談話」を発話によって実現される意味的な単位と捉え、「結束構造と結束性を持つ言語表現の連続体が意味的なまとまりを成すもの」とする。そして、分析単位としての「談話」が誘い会話の中でどのように機能するかに注目する。

「談話」は意味的な性質の強いものであるため、開始と終了を明確に区別できない場合がある。本稿では、南(1972:30)が会話における談話を認定する基準として挙げたものの中⁷⁾で、「その部分自身内部の連続性」と「その談話の話題の性格が一定しているこ

5) 文の上に立つ言語的単位を指す用語には、アメリカの学者によって多く使われている「談話(discourse)」、ヨーロッパで多く使われている「テキスト(text)」、そして、主に日本の国語学で使われる「文章」などがある。

Stubbs(1983/南出・内田訳1989:11)は、談話とテキストという用語には、「書記言語によるテキスト」対「音声言語による談話」といった実現される媒体による区別と、「談話はある程度長さがある、テキストは非常に短いこともある」といった大きさによる区別があるという。野間(2007:16)は、〈書かれたことば〉の実現体を「テキスト(text)」、〈話されたことば〉の実現体を「談話(discourse)」と呼び、実現される媒体によって談話とテキストを区別している。一方、Beaugrande and Dressler(1981/池上他訳1984:28)は、「テキストは談話を構成する個々の要素として結合され、相互に関連し合うテキストの集合という形で談話を構成する」とし、テキストを、談話を構成する要素を指すものと説明している。しかし、Crystal(1987/風間・長谷川監訳1992:179)は、談話とテキストの区別は判然とはしておらず、いずれも、話し言葉か書き言葉にかかわらず、広い意味で使われることがあると述べている。メイナード(2004:2)は、実際の談話現象は話し言葉と書き言葉の両者の特徴を備えた現象として存在することが多いことを挙げ、書き言葉も話し言葉も含めて談話としている。また、Halliday and Hasan(1976/安藤他訳1997:2)は、文より大きい単位をテキストとし、それは文法の単位ではなく、運用されている言語の単位であるという。さらに、テキストは、文によって構成される形式的な単位ではなく、文によって実現される意味的な単位であると説明している。

主に日本の国語学で用いられる「文章」という用語は時枝(1953)から始まる。時枝(1953)は、言語活動を言語研究の対象に含めるべきだと主張する上に、「語」、「文」、「文章」の3つを言語学の対象と認定している。時枝の考えを受けついで永野(1972:70)は、文章を「原則として文の連続によって成り立ち、内部に文脈を保ちつつ統一し完結した言語形式を具え、前後に文脈を持たぬもの」と説明している。

以上述べたように、文より大きい単位に関する用語や捉え方は少しずつ異なるが、その基底に共通したものは言語研究においてその単位を認定していることである。

6) テキストという用語は書き言葉、またはテキストの認定要素や構造を中心に取り上げる印象が強く、文章という用語は日本の国語学に限定される色彩が濃い。

7) 南(1972:30)は、(a)その部分の前またはあとのはっきりしたポーズ、(b)その部分自身内部の連続性、(c)その談話(にあたる部分)に現れる各センテンス(にあたる発話)の話し手および聞き手が一定していること、(d)その談話のcommunication上のfunctionが一定していること、(e)その談話の、ことばの調子が一定していること、(f)その談話の話題の性格が一定していること、の6つの基準を挙げている。本稿では、基準(a)は、会話の開始と終了の前後に存在する長い空白以外は用いないことにし、基準(c)、(d)、(e)は、条件統制によって収録した本稿の

と」を談話の認定基準とする。しかし、ここに挙げた話題も、人の百科事典的な知識の違いによって左右されやすいものであるため、話題の抽象的な定義に留まらず、話題を認定する手がかりも提示すべきである。それで、本稿では話題の範囲を認定する手がかりを鄭榮美(2009: 29)にならって示す。話題は、三牧(1999: 50)にならい、「会話の中で導入、展開された内容的に結束性を有する事柄の集合体を認定し、その発話の集合体に共通した概念」と定義する。話題の範囲を認定する手がかりは言語的な要素と構造的な要素に分けて提示する。

A. 言語的な要素

- 1) 話題開始部に見られる要素：初出語、話題を変える意図を示す表現、注目を引く不変化詞(副詞、前置詞、接続しなど)、時制の転換、話題化しようとする事柄に関する質問、話題化しようとする事柄の告知など。
- 2) 話題終了部に見られる要素：やりとりの内容に対するまとめや評価をする表現、限られた反応など。

B. 構造的な要素：質問⇒答え、陳述する⇒応じる

話題の範囲を認定する過程は、4.2で誘いと関与性を持つ談話の区別方法の説明と合わせて行う。

4.2 「誘い談話」、「誘い関連談話」、「非誘い談話」の区別

分析においては、当該の誘い会話で取り上げるすべての話題を細かく分類することを避け、誘い内容との関与性を根拠に、「誘い談話」、「誘い関連談話」、「非誘い談話」という三種類の談話を設ける。関与性というものは相対的なものである。Leech(1983/池上・河上訳、1987: 133)は、発話と発話場面との関与性について、ある発話が話し手または聞き手の会話の目的に貢献していると解釈できれば、その発話は発話場面に関与性があると説明している。本稿では、誘い行動の実現という目的に向けられた発話はそれに強い関与性を持つと想定する。誘い行動は、相手と一緒にある行為を行うことを前提としているので、誘い内容の実現のためには、誘い手と被誘い手が何を(誘い内容)、いつ(日程)、どこで(場所)、誰と(参加者)、どのように(実現のやり方)行うかに関する情報を共有する必要があるだろう。これらに関する発話のやりとりは誘い行動と関与性が強いと捉える。

以下では、誘い行動と発話文との関与性を基に設けた誘い談話、誘い関連談話、非誘い談話の定義を行い、会話例を挙げながら説明する。

- ・ 誘い談話：話し手が聞き手と一緒にある行為を遂行する意図を持ち、それを働き掛け、聞き手とともに、その内容、日程、場所、参加者、実現のやり方などに関連して話し合った発話文の意味的なまとまり。ここには誘い発話文とそれに対する被誘い手

の応答といった誘い行動の核となるやりとりが存在する。

- ・ 非誘い談話：誘いとは関与性の低い話題について話している発話文のまとまり。
- ・ 誘い関連談話：誘い談話の後に続いた非誘い談話の終了後、再開された誘い内容と関与性の強い話題に関するやりとりの意味的なまとまりである。誘い行動の一部分をなすが、誘い談話とは誘い発話文とそれに対する応答がないという点で区別される。

<会話例1> 「誘い談話」、「誘い関連談話」、「非誘い談話」の区別

ライン番号	話者	発話内容	談話
1	JF09	よしっ、出来た、出来たね><{<}	非誘い談話
2	JF10	<はい>{><少し笑い>。	
3	JF09	ははは<笑い>。	
4	JF10	ははは<笑い>。	
5	JF09	えっ、うう、(<笑い>)<笑いながら>えっ今度暇だったらどこか遊びに行かない? => 誘い発話文	誘い行動 JEの誘い談話
6	JF10	あっそうだね。 => 受諾発話文	
7	JF09	うん、<えっ>{<},,	
8	JF10	<うん>{>}。	
9	JF09	なん、いつ暇?。	
10	JF10	/少し間/えー<えー>{<}	
11	JF09	<うん>{>}。	
12	JF09	バイトとか結構あるよね=。	
13	JF09	=土日バイトだくっけ?>{<}	
14	JF10	<そう>{>}=。	
15	JF10	=土曜日は,,	
16	JF09	うん。	
17	JF10	部活とバイトで,,	
18	JF09	<笑いながら>えっなに、部活とバイトと(<笑い>)どっちもやってんの?。	
19	JF10	そう=。	
20	JF10	=日曜日は,,	
21	JF09	うん。	
ライン番号22～ライン番号37まで省略			
38	JF09	<少し笑いながら><え、何言って、主務だよ>{>}。	非誘い談話
39	JF10	え?。	
40	JF09	主務だよ、今。	
41	JF10	うん、そうだけど(うん)。	
42	JF10	でも4人しかいないから。	
43	JF09	えっ、何が?。	
44	JF10	あの一、3年生がね。	
45	JF09	あっ、びっくりした、<笑いながら>部員がかと<思った>{<}	

46	JF10	<笑いながら><違う>{>}違う<笑い>。
47	JF10	だから、主将、副主将を(うん)、主務、会計でもう全部>{<},,
48	JF09	<あっもう>{>}全部<笑いながら>埋まっちゃったの>{<}。
49	JF10	<埋まっ>{>}ちやう<2人笑い>。
ライン番号50～ライン番号62まで省略		
63	JF09	大学卒業しても続ける?。
64	JF10	分かんない<笑い>。
65	JF09	<笑いながら>そこまでは知らないねえ=。
66	JF10	=多分続けたくないんだけど(うん)、筋肉がぶよぶよになっちゃう(あー)やめたら、すごい、それが今から心配。
67	JF09	そうか。
68	JF10	うん。
69	JF09	私もか何かやらないと(そうそう)##なのかな(うーん)。
70	JF09	あ、スポーツやってないから結構やばくなって(笑い)。
71	JF10	でも(うん)、あれでしょ、調布まで自転車で…<2人笑い><<くるん>{<}>。
72	JF09	<でも>{>}、すぐだっ、15分くらいで着くんだっ。
73	JF09	<u>すごい(ああ)飛ばせば</u> 、うーん。
74	JF10	意外と近いのね=。
75	JF09	= <u>ねえ</u> 。
76	JF10	<u>うんうん</u> 。
77	JF09	<u>すごい飛ばしてる</u> <2人笑い>。
78	JF09	<u>うーん</u> 。
79	JF09	<u>あ、じゃ、6月は全然無理?</u>
80	JF10	あー、平日とかだったら(ああ)、うん、水曜、,
81	JF09	ああ、私水曜大丈夫だ>{<}。
82	JF10	<あっ>{>}本当?。
83	JF09	<うん>{<}。
84	JF10	<夕方>{>}とか<大丈夫?>{<}。
85	JF09	<あ、夕方無理だ>{>}<2人笑い>。
86	JF09	<笑いながら><笑い>夕方バイト行っちゃう<2人笑い>。
87	JF10	<u>うん</u> 。
88	JF09	<u>うん</u> 。
89	JF10	<u>そうだね</u> 。
90	JF09	<u>ねえ</u> <2人笑い>。
91	JF10	<笑いながら> <u>そんな感じで</u> =。
92	JF09	= <u>そんな感じだよ</u> ね=。
93	JF10	= <u>うーん</u> 。
94	JF09	<u>え、夏休みとかなんか予定ないの?</u>

誘い
行動
JEの
誘い
関連
談話
①

95	JF10	夏休みは一(うん)、うん、8月は何にも、あ、でも,,	非誘 い談 話
96	JF09	うん<2人笑い>。	
97	JF10	なんか、妹が一(うんうんうん)こう、カナダに行くって<言ってる>{<}>。	
98	JF09	<また行くの?>{<}>。	
99	JF10	そうそう、なんか。	
100	JF09	うん、去年も行ったよね。	

[<日本語会話5>より]

<会話例1>は、JF09がJF10に遊びに行くことを誘うやりとりの一部分である。紙面の都合上、やりとりの一部分を省略してある。ライン番号1でJF09は、「よしっ、出来た、出来たね」とレコーダーの設定ができたと話す。JF10は「はい」とそれに対する反応を示す。このやりとりは、話題の「陳述する－反応する」という構造的な要素の条件を満たしている。ライン番号1～4までのやりとりとライン番号5以降のやりとりとは、結束性を持っていないので、ライン番号4までを1つのまとまりとして認めることができる。ライン番号5の発話文は、「暇」、「遊び」のような初出語を含んだ質問文である。JF09の質問に対するJF10の応答(「質問－答え」の構造的要素)があり、それに続くライン番号21までのやりとりは、「暇」と結束性を持つ日程に関する話を中心となる。その後、部活や通学の方法に関する話が続き、ライン番号73～78では、先行する発話内容の繰り返しや「うん」、「ねえ」のような限られた反応が現れている。JF09の「あ、じゃ、6月は全然無理?」という発話文では先行するやりとりと結束生を持たない「6月」という言葉が現れる。それで、ライン番号79から新しい話題が現れたと判断できる。ライン番号79に続くやりとりでは、「水曜日」と「夕方」という言葉が「6月」と結束生を保っている。また、ライン番号87～93では限られた反応が現れている。その後のライン番号94の発話文は「夏休み」という初出語を含んだ質問文である。したがって、ライン番号79～93までを1つのまとまりとして認めることができる。このようなやり方で<会話例1>における話題を抽出すると、「レコーダーの設定の確認」(ライン番号1～4)、「暇なとき遊びに行くための日程に関する話し合い」(ライン番号5～21)、「JF10の部活に関する話」(ライン番号38～70)、「JF09の通学方法」(ライン番号71～78)、「6月のスケジュール」(ライン番号79～93)、「夏休みの予定」(ライン番号94～100)の6つの話題が抽出できる。

この中で、ライン番号5～21のやりとりは、誘い発話文とそれに対する受諾発話文を含み、誘い内容を実行に移すための日程の調節を行っているので、誘い談話として認定できる。また、ライン番号79～93のやりとりでは、先行する誘い談話で合意点を探せなかった日程の調節が再び行われている。誘い発話文とそれに対する応答はないが、誘い内容の実行に向けた日程調節という誘い行動の一部分となるやりとりなので誘い関連談話として認定できる。ライン番号1～4、ライン番号38～70、ライン番号71～78、ライン番号94～100の

やりとりは、誘いとは関与性が低い話題である。本稿では誘い行動に焦点を置くため、これらを話題ごとに区切ることを避け、誘い談話と誘い関連談話の前後に現れる誘いと関与性の低いやりとりはすべて非誘い談話とする。したがって、〈会話例1〉の展開を談話レベルで示すと「非誘い談話⇒誘い談話⇒非誘い談話⇒誘い関連談話⇒非誘い談話」ということになる。

5. 分析結果及び考察

誘い会話から抽出できた各談話に関する基本情報を示すと〈表1〉のようである。各談話の抽出における評定者間信頼係数⁸⁾は韓国語で $k=0.897$ 、日本語で $k=0.887$ であり、談話抽出における信頼性が十分に高いことを確認した。

〈表1〉韓日の誘い会話における誘い談話、誘い関連談話、非誘い談話の抽出結果

言語	誘い会話 の総数	誘い行動 の総数	誘い会話を成す各談話の数		
			誘い談話	誘い関連談話	非誘い談話
韓国語	12	26	26	9	31
日本語	12	17	17	25	50

韓国語では12の誘い会話の中で、計26の誘い行動が現れ、誘い談話が計26、誘い関連談話が計9、非誘い談話が計31抽出できた。日本語では12の誘い会話の中で、計17の誘い行動が現れ、誘い談話が計17、誘い関連談話が計25、非誘い談話が計50抽出できた。誘い談話には誘い行動の核となる誘い発話文とそれに対する応答があるので、1つの誘い行動は1つの誘い談話を持つ。誘い行動において誘い談話は必須のもので、誘い談話の数と誘い行動の数は一致する。しかし、誘い関連談話と非誘い談話は誘い行動において必須のものではなく、これらがなくても誘い行動は成り立つ。誘い行動によっては1つの誘い談話のみで構成されたものもあれば、1つの誘い談話と複数の誘い関連談話で構成されたものもある。韓国語と日本語の誘い会話における各談話の数をカイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められた($\chi^2(2)=9.8584, p=0.007$)。誘い談話は日本語より韓国語の方で多く現れており、誘い関連談話と非誘い談話は日本語の方で多く現れてい

8) 評定者間信頼係数というのは、筆者と第三者との間で談話抽出における一致率をはかったものである。本稿ではCohenのKappa(k)を用いる。 k の値がどの値以上であれば一致度が安定しているかという明確な基準はないが、比較的機械的な作業の要素が強い分類では0.8以上、主観的な作業の要素が強い分類では0.7以上であれば、そのデータは信頼できると判断される。本稿では韓日ともに4会話における評定者間信頼係数を測定しており、本稿で示した値は4会話から得られた評定者間信頼係数の平均値である。

る。つまり、韓日の各12会話で誘い行動の生起率は韓国語の方が日本語より高く、日本語では、韓国語に比べて、1つの誘い行動が誘い談話と誘い関連談話で構成されることが多いことを表すと言える。

5.1 誘い会話における談話の展開

本節では、上記に示した各談話が各誘い会話でどのように展開しているかを示す。これによって談話レベルでの誘い行動の流れが検討できると考える。各誘い会話においてどの誘い行動が行われているのかを示すために、各誘い談話は当該の誘い行動の番号を付けて示す。誘い行動の番号は、便宜上、言語(韓国語K、日本語J)の区別をし、「誘い行動KA/JA」、「誘い行動KB/JB」のように現れた順にアルファベット大文字を付けて示す。1つの誘い行動に属する誘い関連談話が複数現れる場合は「KAの誘い関連談話①」、「KAの誘い関連談話②」のように属する誘い行動の番号を併記し、現れた順に通し番号を付ける。まず、韓国語の誘い会話における談話の展開を<表2>に示す。

<表2> 韓国語の誘い会話における誘い談話、誘い関連談話、非誘い談話の展開

会話番号	誘い会話における談話の展開
<韓国語会話1>	非誘い談話⇒KAの誘い談話⇒KBの誘い談話⇒非誘い談話⇒KCの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話2>	非誘い談話⇒KDの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話3>	KEの誘い談話⇒KFの誘い談話⇒KGの誘い談話⇒非誘い談話⇒KHの誘い談話
<韓国語会話4>	非誘い談話⇒KIの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話5>	KJの誘い談話⇒非誘い談話⇒KJの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒KKの誘い談話⇒KLの誘い談話
<韓国語会話6>	非誘い談話⇒KMの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話7>	非誘い談話⇒KNの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話8>	非誘い談話⇒KOの誘い談話
<韓国語会話9>	非誘い談話⇒KPの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話10>	非誘い談話⇒KQの誘い談話⇒非誘い談話⇒KQの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒KQの誘い関連談話②⇒KRの誘い談話⇒KQの誘い関連談話③⇒非誘い談話⇒KRの誘い関連談話①
<韓国語会話11>	誘い関連談話KS①⇒非誘い談話⇒KSの誘い談話⇒非誘い談話⇒KTの誘い談話⇒ KUの誘い談話⇒KVの誘い談話⇒非誘い談話⇒KTの誘い関連談話①⇒KWの誘い談話⇒非誘い談話⇒KSの誘い関連談話②⇒KXの誘い談話⇒非誘い談話
<韓国語会話12>	非誘い談話⇒KYの誘い談話⇒非誘い談話⇒KZの誘い談話⇒非誘い談話⇒KZの誘い関連談話①⇒非誘い談話

韓国語の誘い会話では、1つの誘い会話に複数の誘い行動が現れるものが目立つ。

＜韓国語会話1、3、5、10、11、12＞には、少なくとも2つ、多くて6つの誘い行動が存在する。もう1つ特徴的なことは、多くの誘い行動が誘い談話のみで成り立っていることである。合計26の誘い行動の中で計20の誘い行動が誘い談話のみで成り立ち、残りの6つのみが誘い談話と誘い関連談話で成り立っている。

韓国語で最も複雑な展開を見せる＜韓国語会話11＞を見ると、＜韓国語会話11＞には「誘い行動KS、KT、KU、KV、KW、KX」の6つの誘い行動が現れている。会話の開始とはほぼ同時に「誘い行動KS」に関するやりとりが行われている。「誘い行動KS」は1つの誘い談話と2つの誘い関連談話で構成されているが、「誘い行動KS」の誘い談話と誘い関連談話の間に、別の「誘い行動KT、KU、KV、KW」が行われている。「誘い行動KS」が終了してからまた別の「誘い行動KX」が行われ、その後これらの誘い内容とは関与性の低いやりとりがしばらく続いてから会話は終了する。一方、＜韓国語会話2、4、6、7、9＞は、1つの誘い行動が誘い談話のみで成り立つ単純な展開を見せる。

続いて、日本語の誘い会話における談話の展開を＜表3＞に示す。

＜表3＞ 日本語の誘い会話における誘い談話、誘い関連談話、非誘い談話の展開

会話番号	誘い会話における談話の展開
＜日本語会話1＞	非誘い談話⇒JAの誘い談話⇒非誘い談話⇒JAの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JAの誘い関連談話②⇒非誘い談話
＜日本語会話2＞	非誘い談話⇒JBの誘い談話⇒非誘い談話⇒JBの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JBの誘い関連談話②⇒非誘い談話⇒JBの誘い関連談話③⇒非誘い談話⇒JBの誘い関連談話④⇒非誘い談話⇒JBの誘い関連談話⑤⇒非誘い談話
＜日本語会話3＞	非誘い談話⇒JCの誘い談話⇒非誘い談話⇒JCの誘い関連談話①
＜日本語会話4＞	非誘い談話⇒JDの誘い談話⇒非誘い談話⇒JDの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JDの誘い関連談話②⇒非誘い談話⇒JDの誘い関連談話③⇒非誘い談話
＜日本語会話5＞	非誘い談話⇒JEの誘い談話⇒非誘い談話⇒JEの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JEの誘い関連談話②⇒非誘い談話⇒JEの誘い関連談話③⇒非誘い談話⇒JEの誘い関連談話④⇒非誘い談話⇒JEの誘い関連談話⑤⇒JEの誘い談話⇒非誘い談話
＜日本語会話6＞	非誘い談話⇒JGの誘い談話⇒非誘い談話⇒JHの誘い談話⇒非誘い談話
＜日本語会話7＞	非誘い談話⇒JIの誘い談話⇒非誘い談話
＜日本語会話8＞	JJの誘い談話⇒非誘い談話⇒JJの誘い関連談話①⇒非誘い談話
＜日本語会話9＞	非誘い談話⇒JKの誘い談話⇒非誘い談話⇒JKの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JLの誘い談話⇒非誘い談話⇒JLの誘い関連談話①⇒非誘い談話⇒JLの誘い関連談話②⇒非誘い談話⇒JLの誘い関連談話③⇒非誘い談話
＜日本語会話10＞	非誘い談話⇒JMの誘い談話⇒非誘い談話⇒JMの誘い関連談話①⇒非誘い

	い談話⇒ JNの誘い談話⇒JMの誘い関連談話②⇒非誘い談話⇒JMの誘い関連談話③⇒非誘い談話⇒JMの誘い関連談話④⇒非誘い談話
<日本語会話11>	非誘い談話⇒JOの誘い談話⇒非誘い談話⇒JPの誘い談話⇒非誘い談話
<日本語会話12>	非誘い談話⇒JQの誘い談話⇒非誘い談話

日本語の誘い会話は、各誘い会話に含まれた誘い談話の数と誘い関連談話の数の違いによって多様な展開を見せている。1つの会話に複数の誘い行動が現れたのは<日本語会話5、6、9、10、11>である。中でも最も複雑な展開を見せているのは、<日本語会話5>である。<日本語会話5>には、「誘い行動JE」と「誘い行動JF」が存在する。「誘い行動JE」は1つの誘い談話と5つの誘い関連談話で成り立っている。一方、「誘い行動JF」は1つの誘い談話のみで成り立っている。<日本語会話5>の展開を詳しく説明すると、まず誘いと関与性の低い話題で会話が始まっている。そのやりとりの後、誘い発話文とそれに対する被誘い手の応答を中心に「誘い行動JE」の誘い談話が現れるが、誘いとは関与性の低い話題の挿入(非誘い談話)によって誘い談話は終了する。しばらく非誘い談話が続いた後、再び誘いと関与性の強いやりとりが再開されている。このようなやりとりが何回か繰り返された後、「誘い行動JE」は終了する。その後、また別の誘い内容を有する「誘い行動JF」が起こる。「誘い行動JF」の誘い談話が終わった後は、「誘い行動JE」と「誘い行動JF」とは関与性の低い話題に関するやりとり(非誘い談話)で会話は終了する。この誘い会話に存在する非誘い談話は、会話の開始と終了部に来るものと誘い行動のやりとりの間に挿入されたものを合わせ、計7つである。1つの誘い行動において複数の誘い関連談話が見れる会話は、<日本語会話5>のように非誘い談話と誘い関連談話が互いに入れ替わる形で展開している。

最もシンプルな展開を見せたのは、<日本語会話7>と<日本語会話12>である。これらの会話には1つの誘い行動が現れ、その誘い行動は1つの誘い談話で成り立っている。また、<日本語会話6>と<日本語会話11>では2つの誘い行動が行われているが、各誘い行動はそれぞれ誘い談話のみで成り立ち、前後に各誘い内容と関与性の低い非誘い談話が見れている。

<表2>と<表3>を基に韓国語と日本語の談話レベルでの誘い会話の展開を比較すると、会話の始めと終わりの部分は韓日においてあまり変わらないが、会話の中心部分の展開はかなり異なっていることが分かる。まず、韓国語では1つの誘い会話に複数の誘い談話が立て続けに位置することが目立つ。一方、日本語では1つの会話に複数の誘い関連談話があることが目立つ。また、1つの会話に複数の誘い行動が起こる場合は、誘い行動と誘い行動の間に非誘い談話が見れる傾向が見られる。

本データにおいて韓日の誘い会話における各談話の数が異なったのは、まず、1つに会話における誘い行動の生起率が異なっているためであろう。また、韓国語では複数の誘

い談話が立て続けに現れ、日本語では誘い談話と誘い関連談話の間に非誘い談話が多く現れるという会話展開の特徴が大きく影響していると考えられる。

5.2 談話レベルでの誘い行動の特徴

本節では各誘い行動の開始から終了までの間に非誘い談話が挿入されているか否かに焦点を置き、談話レベルで韓日比較を行う。誘い行動は誘い談話のみで構成されたものもあれば、誘い談話と誘い関連談話で構成されたものもある。1つの誘い行動が誘い談話と誘い関連談話で構成されていることは、誘い内容の実行に向けた話し合いの途中に、誘い内容と関与性の低い話題に関するやりとり(非誘い談話)が挿入されていることを意味する。〈表2〉と〈表3〉で示したように、各誘い行動が会話の中で占める位置は異なるが、各誘い行動を取り出し、その行動の開始から終了までの間に、非誘い談話が挿入されているか否かという観点から分けると図1のようである。

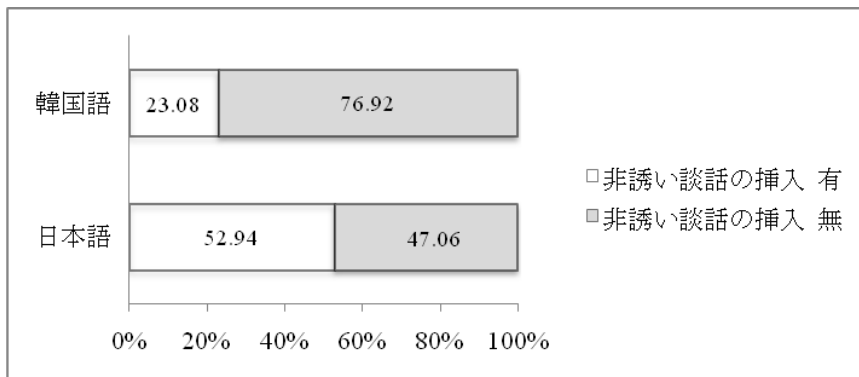


図1. 誘い行動における非誘い談話の挿入の有無の韓日比較

注. 韓国語ではn=26であり、日本語ではn=17である。

韓国語では計26の誘い行動の中で、非誘い談話の挿入が起こったものは、23.08%(6つの誘い行動)であり、非誘い談話の挿入がなかったものは76.92%(計20の誘い行動)である。日本語では計17の誘い行動の中で、非誘い談話の挿入が起こったものは、52.94%(9つの誘い行動)であり、非誘い談話の挿入がなかったものは47.06%(8つの誘い行動)である。非誘い談話が挿入されたものと挿入されないものがほぼ半々の割合を占めている。韓国語と日本語の誘い行動における非誘い談話の挿入の有無をカイ二乗検定で比較した結果、有意な差が認められた($\chi^2(1) = 4.0359, p = 0.0445$)。

この結果から、韓国語より日本語の方で誘い行動の開始から終了までの間、誘い内容と関与性の低い話題を挿入する傾向があると言える。また、韓国語では一旦誘い行動が

始まると終了するまでは誘いと関与性の低い話題の挿入を避ける傾向があることが分かる。このような韓日の誘い行動の特徴は、会話の時間の長さに影響を与えていると考える。3.2で既述した会話データの基本情報を基に韓日の会話時間を比較すると、韓国語会話データが日本語会話データより約1時間30分位短い。しかし、総時間内で起こった誘い行動の数は、韓国語(計26)が日本語(計17)より多い。日本語では誘い行動の途中で誘いと関与性の低い話題の挿入が頻繁に起こるため、1つの誘い行動の開始から終了までにかかる時間が長くなっていることが推測できる。

誘い行動の途中で起こる非誘い談話の挿入は、誘い行動の遂行という目的からすると不必要なことである。それでは、なぜこのように誘い行動の途中で非誘い談話の挿入が起こるか、その理由を類推する。

誘い行動の進行中に非誘い談話の挿入が起こる理由として考えられるのは2つある。一つは「相手への配慮」で、もう一つは「誘い行動のテンポを遅らせること」である。まず、「相手への配慮」について上記の〈会話例1〉の誘い関連談話の後に続く非誘い談話を例に挙げて説明する。この例は誘い手が誘い行動の途中で誘い手が非誘い談話を挿入し、誘い行動を中断させることで被誘い手に対する配慮を表していると考えられるものである。

誘い手のJF09はJF10を誘った後、実行できそうな日にちを提案するが、JF10の都合が悪く、なかなか日程が決められない。JF09は、JF10が誘いに対する受諾の意向を示してはいるものの、自分の提案を受け入れることができない状況であることが分かる。しかし、すぐ別の代案を提示せず、話題をJF10と関連したものに変える(JF10の部活に関する話)。ある程度のやりとりが終わった後、再び日程を提案することで誘い行動を再開する。そこでも合意点が導き出せず、JF09は話題を転換している(ライン番号94)。誘い行動の遂行を目的とする誘い手のJF09が自ら日程の交渉を中断させ、誘いと関与性の低い話題を導入したのは、自分の提案を受け入れられない被誘い手のJF10の状況を配慮し、JF10の負担を減らしてあげるためであると考えられる。その上、相手に関する話題を取り上げることで、相手への興味を示している。話題の選択においては、ポジティブ・ポライトネスの1番目のストラテジー(以下PPS1)の「聞き手(の関心、欲求、必要、所有物)に注意・注目する」を用い、JF10のポジティブ・フェイスを配慮していると言える。一方、誘い行動の談話レベルのストラテジーという側面から見ると、誘い行動の進行中に別の話題を挿入し、誘いの日程を決めることに対するJF10の負担感を減らしてあげるというJF10のネガティブ・フェイスへの配慮と解釈できる。

被誘い手による非誘い談話の導入でも同様の働きが見られる。

〈会話例2〉 被誘い手の非誘い談話の挿入による配慮行動

ライン番号	話者	発話内容	談話
75	KF19	아우-너 집에 언제 내려, 언제 올라가게? (あう、あなたいつ、いつ実家に帰る?)	非誘 い談 話
76	KF20	나는 다음 주 일요일, <엄마>{<, (私は来週の日曜日、<母>{<,、)	
77	KF19	<왜?>{>.<どうして?>{>。)	
78	KF20	오신대니깐=. (来るそうだから=。)	
79	KF20	컴퓨터 들고 가야돼. (パソコン持って帰らなければならない。)	
80	KF19	거 그냥 갔다가 엄마랑 다시 그냥 내려오면 안 돼? (その時帰って、お母さんと、再びこっちに戻って来ちゃダメ?)	
81	KF19	나 혼자 외롭게 가라고[↑], 으으- (私一人で寂しく帰ろうっていうの[↑]、ううー。)	
라인番号82~86まで省略			
87	KF19	너무해(어-), 나 혼자 가 그냥 (으흐흐흐), 치- (ひどい(あー)、私一人で帰るの(うふふふ)、チェッ。)	誘い 行動 KQの 誘い 談話
88	KF20	난감한대.(困ったな。)	
89	KF19	같은 지역 사는 사람끼리 너무 하는 거 아니야. (同じ地域に住んでいる人同士なのに、あまりにもひどいとは思わない。)	
90	KF20	방학 동안에 만나기나 하자고.(夏休みの間会おうね。) ⇒誘い発話文	
91	KF20	<웃으면서>같은 지역 살면서 방학 동안에 만나지도 않고. (<笑いながら>同じ地域に住んでいるのに、休みの間会わないなんて。)	
92	KF19	어후[한숨], 근데 방학 때 만날 수 있을까? (ひゅー[溜息]、でも休みに会えるかな?) ⇒保留	
93	KF19	방학 때 뭐 할꺼야.(休みの間何するつもり?)	
94	KF19	공부 할꺼야?(勉強するの?)	
95	KF20	하하하, <웃으면서><방학 때>{<, (ははは、<笑いながら><夏休みに> {<,、)	
96	KF19	<왜?>{> 공부 소리 나니깐 왜 웃어?(<웃음>). (<どうして>{>)勉強の話になると笑うの?(<笑い>。)	
97	KF20	방학 때 나 라섹수술하고, 그거 수술할라면 계속 1달에 보름 정도는 집에 있어야 된대.(休みに中にラセック近視矯正手術手術をして、それやるためには15日間位は外に出てはいけなそうよ。)	
98	KF20	밖에 못 나가, 나갈 수 있는데 안경 쓰고 나가야 되니깐, 밖에 별로 나가기 싫어.(外に出られない、出ることにはできるけど眼鏡をかけなければならぬので、あまり外には出たくない。)	
라인番号99~123まで省略			
124	KF19	나 차라리 영어가 난 것 같애, (히히) 글 쓰는 것 보다. (私はかえって英語の方がいい、(ひひ)作文よりは。)	非誘 い談 話
125	KF20	나 상대문학 이번에 너무 어려워.(私上代文学今回はあまりにも難し	

		い。)	
126	KF19	영어야 그거 짝을 수라도 있지, 그런 그런 거 뭐어 엠 뭐 이런 거 들어가는 것.(英語は、適当に番号を選べるけど、それはそれは、なに、エム、そういうのが含まれたやつ。)	
127	KF19	/잠시간격/어, 방학 때, 그러면은 우리 방학 2달이지? (/少し間/うん、休みのとき、夏休み2ヶ月間だよね?。)	誘い行動 KQの 誘い 関連 談話 ①
128	KF20	응.(うん。)	
129	KF19	1달 동안 밖에 못 나온다고?(1ヶ月間は外に出られないということ?。)	
130	KF20	응, 못 나가용, 나가도 이제 7월말 8월.[↑] (うん、出られない、出ても7月末か、8月。[↑])	
131	KF19	8월?(8月?。)	
132	KF19	8월 방학이잖아 어차피.(8月夏休みでしょう、どうせ。)	
133	KF20	맞어.(そうね。)	
134	KF20	우리 아 맞어, 우리 9월1일 날 개강이랬어. (私達、そうだね、9月1日学校始まるそうだよ。)	
135	KF19	그럼 8월 달에 보자.(では、8月に会おう。) ⇒受諾	
136	KF20	그래, 8월<달에><【 【.(分かった、8月<に><【【。)	

[<韓国語会話10>より]

<会話例2>は、<韓国語会話10>における「誘い行動KQ」の一部分である。KF19とKF20は実家が同地域であるが、夏休みに一人で実家へ帰ることになったJF19が不満気に話をしている(ライン番号75～84まで)。それを受け、KF20は「방학 동안에 만나기나 하자고.(夏休みの間会おうね。)」(ライン番号90)と夏休み中に地元で会うことを誘う。KF19はその誘いに対して「어후, 근데 방학 때 만날 수 있을까?(ひゅー、でも休み中に会えるかな?。)」(ライン番号92)と答え、明確な意向を示さない。その後、KF20の夏休みの予定を尋ねている。しばらく、誘いとは関与性の低い話題が続き、KF19が「어, 방학 때, 그러면은 우리 방학 2달이지?(うん、休みのとき、夏休み2ヶ月間だよね?。)」(ライン番号127)と発することによって、誘い関連談話が開始される。そして、ライン番号135の発話文で受諾の意向を明示している。

夏休みの予定をまだ決めていないKF19は、夏休みに会おうというKF20の誘いにすぐ受諾することができず、自ら話題をKF20の夏休みの予定へと変え、誘い行動の進行を中断させる。このような態度は一見すると誘いに対する断りとして考えられるが、KF19が一時中断された誘い行動に関連するやりとり(誘い関連談話)を再開していることと後ほど明確な受諾の意向を明示していることからすると、意向表明の保留と解釈できる。受諾が期待される誘いに対する保留は、誘い手のポジティブ・フェイスを侵害することになる。KF19は保留によってKF20のポジティブ・フェイスを侵害した後、すぐKF20に関する話題を取り上げている(ライン番号93)。この発話文もPPS1の「H(の関心、欲求、必要、所有物)に注意・注

目する」として捉えられるものである。KF19は、KF20のポジティブ・フェイスを侵害したこと補うかのように、KF20に関する話題を取り上げることでKF20のポジティブ・フェイスへの配慮行動を行っていると考えられる。

次は、「誘い行動のテンポを遅らせること」について述べる。〈会話例3〉は、「誘い行動JM」の日程の交渉中に起こった非誘い談話の挿入である。

〈会話例3〉 非誘い談話の挿入によって誘い行動のテンポを遅らせる例

ライン番号	話者	発話内容	談話
189	JF19	<今度>{>}「友人02の名前」ちゃん家‘ち’行こうよ。⇒誘い発話文	誘い行動JMの誘い談話
190	JF20	行きたい。⇒受諾	
191	JF20	いつ?。	
192	JF19	えっ?、(＜少し笑い＞)決める?、＜決める?＞{<}。	
193	JF20	<えっ>{>}、うちらが決めてもいいの?<笑い>。	
ライン番号194～204まで省略			
205	JF19	っていうか、ここ授業ある?。	非誘い談話
206	JF20	=ある。	
207	JF19	うわ、なんか、メール来たぜ。	
208	JF19	だーれ。	
209	JF20	メール来たぜ。	
210	JF19	あっ友達だ。	
211	JF19	いいや。	

[〈日本語会話10〉より]

ライン番号207からの非誘い談話は、先行する誘い談話を中断させている。誘い手JF19の誘いに対して、被誘い手JF20は受諾の意向を示した後、すぐ「いつ?」(ライン番号191)と日程を尋ねている。このような積極的な態度に当惑したかのように、誘い手のJF19は「えっ?、決める?、決める?」(ライン番号192)と聞き返している。その後、友人02の都合や自分のスケジュールを話しながら少しずつ日程の調整を行っている。その過程の中で非誘い談話を挿入し、誘い行動を中断させ、再び誘い関連談話の導入によって誘い行動を再開している。ここでの誘い手による非誘い談話の導入は、被誘い手への配慮というより、かえって被誘い手に、誘い手が誘い内容の実行をあまり好まず、社交辞令に被誘い手を誘ったという印象を与える恐れのあるものである。しかし、談話レベルで〈誘い行動JM〉の全体のやりとりを見ると、誘い手が誘い関連談話を主に導入したり、誘い内容の実行に向けて色んな提案をしたりするなど積極的に取り組んでいることが分かる。そこで、ここでは誘い手が非誘い談話を挿入することで、被誘い手の積極的な反応によって早く進みそうな話のテンポを少し遅らせていると解釈できる。

6. 終わりに

本稿では、会話参加者の属性と誘い内容の負担の度合いを条件統制した上で収集した会話を用いて、そこで行われる誘い行動を談話レベルで分析した。会話におけるやりとりを誘い内容との関与度によって「誘い談話」、「誘い関連談話」、「非誘い談話」の3種類に分け、韓日比較をした結果、韓国語では日本語より誘い談話の数が多く、日本語では韓国語より誘い関連談話と非誘い談話の数が多かった。そこで、韓日の各12会話で誘い行動の生起率は韓国語の方が日本語より高く、日本語では、韓国語に比べて、1つの誘い行動が誘い談話と誘い関連談話で構成されることが多いことが分かった。また、韓国語では、日本語に比べて1つの会話に複数の誘い行動が立て続けに起こる傾向があり、日本語では1つの会話に複数の誘い行動が現れる場合は、誘い行動と誘い行動の間に誘いと関与性の低い話題の挿入が起こる傾向が明らかになった。さらに、韓国語では誘い行動の開始から終了までの間には、誘いと関与性の低い話題(非誘い談話)を挿入しない傾向があるが、日本語では韓国語に比べて、誘い行動の途中で誘いと関与性の低い話題の挿入が起こる傾向があることが分かった。誘い行動の途中で起こる非誘い談話の挿入からは、「相手への配慮」と「誘い行動のテンポを遅らせる」という2つの働きが見られた。

本稿では女子大学生の友人間で起こった負担の少ない誘い行動を分析したが、今後は、本稿を基に、性別、上下関係、負担の度合いを調節し、各要因が誘い行動にどのような影響を与えるかを研究したい。

【参考文献】

- 高永根(1992)『国語文法論(下)』国家考試研究学会、pp.100-113.
 서정수(1996)『국어문법』한양대학교출판원、pp.428-431.
 장경희(2000)「청유화행에 대한 수락과 거절」『텍스트언어학』9、한국텍스트언어학회、pp.111-143.
 최현배(1978)『<김고 고침> 우리말본』정음사、pp.278-281.
 허웅(1975)『우리 옛말본』샘문화사、pp.486-521.
 宇佐美まゆみ(2007)「改訂版：基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System

- for Japanese:BTSJ) 2007年3月31日改訂版』『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度科学研究費補助金基盤研究B (2) 研究成果報告書、pp.17-36.
- 宇佐美まゆみ・李恩美・鄭榮美・金銀美 (2007) 「基本的な文字化の原則 (Basic Transcription System for Japanese:BTSJ) の韓国語への応用について」『談話研究と日本語教育の有機的統合のための基礎的研究とマルチメディア教材の試作』平成15-18年度 科学研究費補助金 基盤研究B (2) 研究成果報告書、pp.48-82.
- 大倉美和子(2002) 「語用論研究と日本語教育-メキシコ人と日本人の「誘いを断る発話」」『対照研究と日本語教育』国立国語研究所、pp.109-127.
- 柏崎秀子(1995) 「談話レベルで捉える丁寧さ-談話展開が丁寧度評定に与える影響-」『日本文化研究所紀要』亜細亜大学日本文化研究所、p62.
- ザトラウスキー・ポリー(1993) 『日本語の談話の構造分析-勧誘のストラテジーの考察-』くろしお出版.
- 鈴木睦(2003) 「コミュニケーションからみた勧誘のしくみ-日本語教育の視点から-」『社会言語科学』6(1)、社会言語学会、pp.112-121.
- 鄭榮美(2006) 「友人間で行われる『誘い』の日韓対照研究-『誘い』におけるストラテジーを中心に-」『言語情報学研究報告』13、21世紀COEプログラム「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」東京外国語大学地域文化研究科、pp.181-202.
- 鄭榮美(2007) 「『誘い』の日韓対照研究-『誘い展開』に焦点をおいて-」『東京外国語大学日本研究教育年報』11、東京外国語大学日本課程、pp.35-55.
- 鄭榮美(2009) 「話題導入ストラテジーの韓日対照研究」『日本文化学報』42、韓国日本文化学会、p.29.
- 鄭榮美(2011) 「誘い談話の構造分析-ポライトネス理論の観点から-」『日語日文学研究』79-1、韓国日語日文学会、pp.389-409.
- 筒井佐代(2002) 「会話の構造分析と会話教育」『日本語日本文化研究』12、大阪外国語大学日本語講座、pp.9-21.
- 時枝誠記(1953) 「文章研究の要請と課題」『時枝誠記博士論文集第二冊文法・文章論』(時枝誠記著1975)、岩波書店、pp.175-186.
- 仁田義雄(1989) 「『行こうか戻ろうか』をめぐって」『日本語学』、明治書院、pp.57-69.
- 野間秀樹(2007) 「試論:ことばを学ぶことの根拠はどこに在るのか-韓国語教育の視座」『韓国語教育論講座』1(野間秀樹(編))、くろしお、p16.
- 永野賢(1972) 『文章論詳説-文法論的考察-』朝倉書店、p70.
- 南不二男(1972) 「日常会話の構造-とくにその単位について-」『月刊言語』5(1)、pp.28-35.
- 三牧陽子(1999) 「初対面会話における話題選択スキーマとストラテジー」『日本語教育』103、p50.

- メイナード, 泉子・K(2004)『談話言語学』くろしお出版、p2.
- 姫野伴子(1991)「依頼と勧誘－受益者表現の日英対照を中心に－」『世界の日本語教育』1 国際交流基金日本語国際センター、pp.69-81.
- 姫野伴子(2000)「勧めの表現形式」『留学生教育』埼玉大学留学生センター、pp.1-11.
- 堀口和吉(1975)「「～ショウ」「シマショウ」の表現について」『日本語・日本文化』4 大阪外国語大学研究留学生別科、pp.39-49
- 劉建華(1985)「勧誘・応答における中日言語行動の比較－「直接表現型」と「調和重視方」をめぐる」『待兼山論叢』18、大阪大学文学部、pp.17-38.
- Beaugrande,R and Dressler,W (1981) *Introduction to text linguistics*. Longman.
(池上嘉彦・三宮郁子・川村三喜男・伊藤たかね(1984)『テキスト言語学入門』紀伊国屋書店)、p28.
- Brown,P.and Levinson,S.C.(1987) *Politeness - Some universals in language usage*. Cambridge:Cambridge University Press.
- Crystal, D.(1987)*The Cambridge Encyclopedia of Language*. Cambridge University Press. (風間喜代三・長谷川欣佑監訳 (1992)『言語学百科事典』大修館書店)、p179.
- García, C.(1992)Refusing an invitation: A case study of peruvian style. *Hispanic Linguistics*5. pp.207-247.
- García, C.(1999)The three stages of Venezuelan invitations and responses. *Multilingual*18-4. Amsterdam ; New York : Mouton Publishers、pp.391-433.
- Halliday,M.A.K. and Hasan,Ruqaiya(1976)*Cohesion in English*. London:Longman.
(安藤貞雄・多田保行・永田竜男・中川憲・高口圭輔(1997)『テキストはどのように構成されるか』ひつじ書房。) p2.
- Leech,G.N(1983) *Principles of Pragmatics*. London:Longman.(池上嘉彦・河上誓作訳(1987)『語用論』紀伊国屋書店)、p133.
- Stubbs,M. (1983) *Discourse Analysis:The Sociolinguistic Analysis of Natural Language*. Blackwell. (南出康世・内田聖二共訳 (1989)『談話分析：自然言語の社会言語学的分析』研究社)、p11.

要 旨

本稿は、韓日の母語話者間の会話で起こった韓日の誘い行動を談話レベルで比較したものである。会話参加者は親しい友人関係にある女子大学生(韓国人24名、日本人24名)で、誘い内容は負担の少ないものに条件統制してある。韓国語では12会話から計26の誘い行動が抽出でき、日本語では12会話から計17の誘い行動が抽出できた。すべての誘いは相手から受諾を得ている。

会話におけるやりとりを誘い内容との関与度によって誘い談話、誘い関連談話、非誘い談話の3種類に分け、談話レベルで比較した結果、韓国語では日本語より誘い談話が多く、日本語では韓国語より誘い関連談話と非誘い談話が多かった。各談話の展開から誘い行動の特徴を検討した結果、韓国語では1つの会話に複数の誘い行動が立て続けに起こる傾向があり、日本語では1つの会話に複数の誘い行動が現れる場合は、誘い行動と誘い行動の間に非誘い談話が挿入される傾向があった。さらに、韓国語では誘い行動の開始から終了までの間には誘いと関与性の低い話題(非誘い談話)を挿入しない傾向があるが、日本語では韓国語に比べて、誘い行動の途中で誘いと関与性の低い話題の挿入が起こる傾向が明らかになった。つまり、韓国語は日本語より1つの誘い行動が1つの誘い談話のみで構成されたものが多いが、日本語では1つの誘い行動が誘い談話と誘い関連談話で構成されたものが多い。誘い行動の途中で起こる非誘い談話の挿入からは、「相手への配慮」と「誘い行動のテンポを遅らせる」という2つの働きが見られた。

キーワード：誘い行動、ポライトネス、誘い談話、談話レベル、
談話レベルのストラテジー

투 고 : 2012. 2. 29
1차 심사 : 2012. 3. 17
2차 심사 : 2012. 4. 7